The University of Osaka
Institutional Knowledge Archive

Title	哲学史の変奏曲
Author(s)	伊東, 道生
Citation	カンティアーナ. 1992, 23, p. 27-46
Version Type	VoR
URL	https://doi.org/10.18910/66705
rights	
Note	

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

https://ir.library.osaka-u.ac.jp/

The University of Osaka

哲学史の変奏曲

伊東道生

ブルッカーに始まり、カントで転回点をむかえ、ヘーゲルで完成したという哲学史についての〈物語（イストワール）〉がある。

「ブルッカー以来、哲学の歴史において何もなされなかった。[1]」

「カントの批判的な仕事は、全面的な哲学革命を引き起こしたのとおなじように、必然的に哲学の歴史の論じ方を完全に変革した。またそれについて従来書かれた最良の著作でさえも、批判的原理に従って書かれるべき哲学の歴史と較べれば、資料収集以上のものではないとみなしうる。[2]」

「哲学史が独立した学になったのはヘーゲルによる。[3]」

K・フォアレンダーによっても指摘されているカント[4]ならびにその後の「カント世代」の〈革命〉のきっかけとなったのは、『純粋理性批判』の最終章「純粋理性の歴史」である。カントは、そこで(1)理性認識の対象に関して、「感覚論」と「知性論」(Intellektualismus)、と「学的」(scientifisch)、そして学的方法を「独断的」(ヴォルフ)

と「懐疑的」（ヒューム）に分けたうえで、なお残されている「批判的方法」をとれば、人間理性が満足する可能性を表明している。[5]

一

哲学史の先駆者にブルッカーを挙げる理由としては、

(1)ブルッカー自身が序文で、護教のための著作ではなく、あくまで歴史の著作であると主張している点。しかもこの歴史は、啓示によって一気に真理の明るみにもたらされるものではなく、「人間精神の歴史」として真理へと徐々に高まっていく。彼に先立つスタンレーが、護教的精神から『哲学史』[6]を著したのは、ヘーゲルの言によっても著名であるが、[7]ブルッカーは「理神論」的立場から宗教を学問の対象として扱った。

(2)また、哲学体系を判断するにあたっては、それ自身により、決して著作者や「当代」の観念によっていないという点。

(3)方法の自覚。出典を明記し、典拠の曖昧なものを批判したという点、などであろう。[8]

ブルッカーの『批判的哲学史』と『要綱』[9]は、テンネマンの『要綱』[10]が出版されるまで半世紀以上にわたって、教育用に使用されていたのであるが、ブルッカーをもてはやしたのは、後にさまざまな哲学史を著したドイツの同国人ばかりではない。このテンネマンの『要綱』をフランス語に翻訳したV・クーザンにとっても、「ブルッカーは哲学史の父であり、テンネマンはブルッカーの真の後継者である」。[11]

さらに、テンネマン自身がドイツ語訳を行ったジェランドにとって、「ブルッカーは、この研究分野に携わる人

々すべての第一級の指針であり、必要な指針であり」「このジャンルでは、今日でも日の目を見るもっとも壮大な作品である」と評価されている。[12]

これを遡ると、百科全書派にあたる。

「本来ならここで、哲学において流行したさまざまな見解を要約してたどらねばならぬところだが、この項目に許された紙数がそれを許さない。読者は、最も有名な諸見解の要点を、この辞書のさまざまな他の箇所で、それらが関係する諸項目について見ていただきたい。この問題を徹底的に追求したい人は、ブルッカー氏がはじめはドイツ語で、ついでラテン語でも『ヤコブ・ブルケルススの批判的哲学史、世界の揺藍から現代までの展開』という表題で公刊したすぐれた書物のうちに、満足のできる記述を豊富に見出されるであろう。[13]」

ブルッカーの『批判的哲学史』の第二版は、一七六六年―六七年に出ているが、もはや十八世紀半ばの精神からすると、ブルッカーの大部は考証学的博識であって、そのまま翻訳することがふさわしくなくなっている。[14] 従って、彼の著作は「要綱」というかたちで紹介される。例えば、一七六〇年にはフォルメイによる仏訳の、一七九一年にはエンフィールドによる英訳の『概要』が出版されている。[15]

先に挙げた『百科全書』でディドロも、哲学史に関する項目でブルッカーに依拠していることを告げているが、彼もブルッカーを、初めてフランスの読者に対して、翻訳というかたちでなく翻案というかたちで紹介した。ところが、ディドロは翻案を通り越してしまう。彼は、

(1)ブルッカーの方法は理性だけで経験を必要としないという意味で、完全にデカルト的であって、自らはロックに影響下にあることを自負し、[16]

(2)また、ブルッカーは、ベールやフォントネルのように迷信や寓話の批判に向ったが、キリスト教それ自体に向かい、

(3)その結果、ブルッカーの理神論的傾向を押し進め、唯物論へと変えてしまった。[17]

一方フォルメイは、と言えば、ブルッカーとともにベルリンアカデミーの会員で、彼のよき理解者であり、彼と似てプロテスタントとして無神論や唯物論を嫌悪していた。[18]

さらに、ブルッカーがルネサンスと宗教改革に現代との連続性をみたのに、ディドロはそれを完全に無視してしまった。この点に関しては、フォルメイの見解は定かではないが少なくとも唯物論的解釈が気にくわなかったフォルメイは、改めてブルッカーを紹介することになったのである。[19]

二

ところで、先に引用した百科全書の項目「哲学」には、こういう続きがある。

「〔ブルッカーとともに〕デランド氏の『哲学史』もまた読まれてよい書物である。[20]」

ブルッカー、スタンレー、クロマチアーノ等とならんでテンネマンの『哲学史』の文献にも登場するデランド[21]は、ブルッカーと同時代に同じく『批判的哲学史』を書いた一人である。[22]

ブルッカーの『哲学史』は、デランドの『哲学史』初版（一～三巻）が出版されてからであり、デランドの『哲学史』第四巻は、その後に出版されている。曰く、

「私自身は、〔ブルッカーに対して〕百科全書の有名な作家たちとは反対の気持ちを抱いている。」

「百科全書の紳士たちは……彼の作品が、よく思惟するきっかけとなったと確信しているが、あえて言わせてもらえば、その半分以上が、混乱しており、その結果何にもまねできないほどの無用なものとなっている。[23]」

いわゆる学校哲学（Schulphilosopophie）が盛んで、哲学史は学校や大学で教えられ「要綱」や「ハンドブック」もこのために使われていたドイツと異なり、フランスでは、哲学史はもはや考証学的博識ではなくなり、むしろドイツでいう世俗哲学に近い、教養や楽しみ（divertissement）として受容されていた。従って、デランドにとってブルッカーは、「公衆にヘブライ人やユダヤ人のカバラ哲学などの難解な書を与える」有用性を欠いた、「これみよがしの考証学的博識」としか映らない。[24]

百科全書に協力し、その精神、すなわち「人間精神と啓蒙の進歩の批判的歴史」と「自然資源と人間がなしうる資源の利用との批判的調査・検討」とが、一致はしていないが、「平行線をたどった」かたちで共存しているデランドにとって、考証学的博識は乗り越えられ、有用な知にとって代わられるべきものであった。[25]

それではデランドの哲学史はどういう構想のもとに展開されるのであろうか。

「哲学史は、ある視点からすれば、人間精神の歴史そのものであり、少なくとも、人間精神が可能な限り高い視点に高まったようにみえる歴史である。[26]」

「哲学は、各時代でできうるかぎりの最高の思弁にまで高まってはいるが、……その思弁は常に同じものというわけではなく、最初に発見された真理が新たな真理のための固定点になったり、その発見が多くの教義を生み出したので、決して同じものであるべきでもなかった。[27]」

その企図は、こうである。

「批判的哲学史を書くにあたって私の意図は、人間精神の歴史をそのもっとも好ましい側面から描くことであった。そして、この歴史を一層際立たせるために人間の心情 cœur humain の歴史がそれに結びつき、密接に一体化されるべきである。もし、人間をよく認識しようとすれば、言わばそれを分解し、まずその精神を、次にその心情を考察しなければならないからである。[28]」

具体的には、一、主要な思想の源泉に遡ること。二、同時に、思想の間の無限の多様性や微妙な相互関係を検討すること。三、それらの思想が順々に、あるいは一方から他方がという具合に生まれた過程を浮き彫りにすること。四、古代の哲学者の見解を喚起すること。五、古代の哲学者が、実際に言ったこと以外は言えなかったことを示すことである。こうして、おびただしい真理と誤謬の集まりに注意深く目を配り、識別することが肝要なわけである。[29]

しかしながら、こうした叙述の容観性を重視する点や折衷主義とも思える立場はデランドの言に反して、ブルッカーに近い。敢えて、彼らを分かつのはデカルトに対する評価であろうか。先にも述べたようにデランドの『哲学史』第四巻は、ブルッカーのそれより後に出版されている。ヴォルフ学派のブルッカーを意識したのか、そこで新しい哲学の創始者としてデカルトを高く評価する――

長く失っていた健康を取り戻したように、ヨーロッパの「哲学研究は古代人を尊敬をもって解釈することでなく、古代人自身も研究していた真正な理性 la droite raison に存する」ようになったのであり、その「新しい哲学の起源ばかりでなく、研究を行う的確な方法の全き革新を、われわれはデカルトに負っている」[30]。そして「この新しい哲学の誕生と成長には、おもに五つの事柄が寄与している」[31]。

一、「長い間忘れられ、踏みにじられた理性がその権限をとりもどした。」「……権威の束縛から逃れ、偏見に立ち向かい……自然をじっくり観察した人。それがデカルトであった。」

二、「思惟することを学ぶにあたって明晰明瞭な観念（idées claires et nettes）しか用いず、明晰明瞭な観念が哲学に力と秩序を与えた。」

三、「現代哲学は、デカルトがしたように数学に基づく。彼自身、数学者であった。」

四、「沢山の現代の発明品、巧妙な機械」が新しい哲学をますます信頼あるものにしている。

五、「十六世紀では、学問はすべてばらばらであった。新しい哲学はそれを集め、統一した。しかも、互いに助け合い、一致して真理がより輝くように。ベーコン卿によるとこうして、哲学者は厳密で有用な学問をすべ

て研究対象に含み、一種の百科全書をつくりあげねばならない。[32]」

ここで見るかぎり、一、二、三は直接デカルトに関わるものであるが、四、五はむしろ百科全書的な意味での哲学を念頭に置いたものであり、これ以上はほとんど言及されていない。

デカルト的でありながら、幾分護教的であり、素質として百科全書的。テンネマン以降もはや忘れ去られるデランドの姿は、こうしたものであった。

三

フーコーは、古典主義時代への移行にあたって言語が言語ととり結ぶ関係を、テクストの先行による「註釈」から表象と真実の「批評」へと捉え、[33] さらに、批評（批判）が展開されるイストワールの領域として「博物学」についてこう語った。すなわち、〈目撃者〉という古い意味を回復した historian イストリアン（記述者＝歴史家）は、彼の「視線の採集したものを滑らかな、中性化された、忠実な語で書き写」し、この「『純化』の過程で最初に成立した記述（イストワール）の形式が、自然の記述（イストワール）であ」り、十九世紀における「歴史」の成立に方法論を与えた。[34]

批評（批判）と歴史の結びつきは、実は十七世紀後半からみられるものである。

「十七世紀後半から十八世紀前半にかけて、書物の標題にきわめてしばしば登場する言葉のひとつは、互に結びついた『歴史』と『批評（的）』という二つの語である。」「……ブロー・デランドの『哲学の批評的歴史』……ブルッカーの哲学史も」そうであり、「十九世紀まで続いている」。つまり、「文献学から歴史へという『批評』の

領域の拡大」があり、「『批評的歴史』とは要するに、内容的には厳密な史料批判や、先行する諸種の歴史記述に対する克明な再吟味という手続きをへ、また形式的には、それらの史料や典拠の直接的な引用や、その価値をめぐる詳細な論議をまじえた歴史記述、少なくともそのような歴史記述たらんとするものを意味している」。

そして、「十八世紀後半以後、この結びつきに一部取って代わるのは……『歴史』と『哲学』の結びつきであるが、『批評』と『哲学』の交代はそのまま、約百年間になしとげられた知の支配的形態の転換を物語っている」[35]。

歴史が文学の一ジャンルとして人生の教師ではなく[36]、また考証学的博識でもなくなり[37]、批判もまた、文献批判に終わらず、批判的精神となり[38]、さらにカントの批判主義と結びつき認識論としての哲学批判となる。その一方で哲学が、百科全書的知から純粋哲学へと純化される。

こうして「歴史」と「批判」と「哲学」が交差するコンテクストのなかで、単に「年代記的ではなく[39]」、「愚者の歴史[40]」でもない、批判原理に従った哲学史あるいは「実用的歴史[41]」を記述しようと試みたのが「カント世代」に他ならない。

十八世紀末の哲学史の方法論的論争のきっかけともなった論文において、ラインホルトは、①歴史と哲学を分離、②哲学の定義、③哲学史の定義という戦略をとる。歴史的（historisch）とは経験に依り、哲学的とは思惟に依る、という認識原理に従って、歴史と哲学を批判し[42]、「経験から独立して規定された事物の連関の学」「事物の必然的連関が思惟にのみ負うような」学としての哲学が、「その発生から現代まで経験してきた変化を叙述した総体が哲学史となる[43]。

一方テンネマンは、①歴史の定義、②学の歴史の定義、③哲学史の定義という戦略をとり、時間継起を重視した

うえでの「出来事の結合」[44]という歴史観から、「哲学の連続的形成の叙述、つまり自然と自由の究極根拠と法則についての学の理念を実現する理性の努力の叙述」[45]という哲学史の規定を導き出そうと試みる。彼は、「哲学史の叙述家は歴史のなかにいかなる体系をも持ち込んではならない」[46]と言い、グローマン(Grohmann, J. Chr. A. 1770—1847)そしておそらくラインホルトをも念頭において、「偶然的なもの、可変的なもの、時間継起するものをすべて排除する」哲学史に釘をさす[47]。

同じ批判原理にのっとりながらも、「歴史」へとシフトした哲学史を構想するテンネマンと、「哲学」へシフトした哲学史を構想するラインホルト。古典主義から近代へと移りゆくなかで、歴史と哲学と批判をめぐって、哲学史と格闘した彼らではあるが、既に「純粋哲学」と「歴史主義」への傾倒が垣間見えるようである。

注

哲学史の成立をめぐっては、最近その〈神話〉を解体する試みが多数なされており、拙稿執筆にあたって、とりわけ以下の諸論文に多くを負っている。感謝して記す次第です。

加藤尚武「デカルト中心史観の吟味——ポスト・モダニズムへの疑問」『二一世紀への知的戦略』筑摩書房、一九八七年

栗原　隆「論理思想の歴史」『講座ドイツ観念論』第六巻、弘文堂、一九九〇年

「哲学と哲学史」『ヘーゲル哲学の現在』加藤尚武、安井邦夫、中岡成文編、世界思想社、一九八八年

「哲学の歴史が作られる現場」『現代哲学の冒険8　物語』岩波書店、一九九〇年

柴田隆行「哲学史の成立とその意味」『国学院雑誌』八七巻第六号、一九八六年

「一八世紀末の哲学史論争」『白山哲学』第二一号、一九八七年

「フリードリヒ・シュレーゲルの哲学史観」『国学院雑誌』第八八巻第一二号、一九八七年

「一八世紀末哲学史論争の行方」『白山哲学』第二二号、一九八八年
「哲学史概念の成立」『講座ドイツ観念論』第五巻、弘文堂、一九九〇年
野沢　協　ピエール・ベール『歴史批評辞典1』「解説」、法政大学出版局、一九八七年
Proust, J.: *Diderot et L'Encyclopédie*, Paris, 1962, Slatkine Reprints, 1982.
また、以下の書を参考にした。
Noack, L.: *Philosophie-geschichtliches Lexikon, Historisch-biographisches Handwörterbuch zur Geschichte der Philosophie*, Leipzig, 1879, Reprints, Stuttgart-Bad Cannstatt, 1968.
Philosophen-Lexikon, Handwörterbuch der Philohsophie nach Personen, hrsg. von Werner Ziegenfuss und Gertrud Jung, Walter de Gruyter & Co., Berlin, 1949—1950.

(1) Tiedemann, D.: *Geist der speculativen Philosophie*, 6 Bde., 1797, Bd. 6, Vorrede, S. IV. Aetas Kantiana, 274.

(2) Heydenreich, H.: *Agatapisto Cromaziano kritische Geschichte der Revolutionen der Philosophie in den drey letzten Jahrhunderten*, 1791, S. 229. Aetas Kantiana, 95.

(3) Windelband, W.: *Lehrbuch der Geschichte der Philosophie*, Billige Ausgabe, hrsg. von H. Heimsoeth, J. C. B. Mohr, 1935. S. 9.

(4) 「イギリス人のスタンレーあるいはドイツ人のブルッカーのようなきわめて古い歴史叙述は、今日われわれにとっては骨董的な興味しかもたない。哲学史に対する体系的な関心が起こったのは、カントによる大革新があって初めてのことである。」(Vorländer, K.: *Geschichte der Philosophie*, Bd. 1., 1903, 9. Aufl., neu gearbeitet von E. Metzke, Richard Meiner Verlag, 1949, S. 9.)

(5) Kant, I.: *Kritik der reinen Vernunnft*, 1781 / 87, A852—856=B880—884. フュルボルンは、これを受けて論文「哲学の精神を叙述するとはどういうことか」のなかで、哲学の精神を独断的、懐疑的、批判的に分け、批判的方法に従って「実用的歴史」を構想している。Fülleborn, G. G.: „Was heisst den Geist einer Philophie darstellen ?" in: *Beyträge zur Geschichte der Philosophie*, 1794, Bd. 2, Aetas Kantiana, 77.

(6) Stanley, T: *The History of Philosophy*, London, 1655.

(7) キリスト教以前の「古代哲学だけがあって、キリスト教とともに哲学の時代は過ぎ去った。哲学は異教徒の営みであって、キリスト教では真理がそっくり目の前に置かれている、というのが当時の普通の考えだった」(Hegel, G. W. F.: *Werke in zwanzig Bänden*, hrsg. von, E. Moldenhauer u. K. M. Michel, Suhrkamp Verlag, 1971, Bd. 18, S. 133)。〈ーゲルは同じ『哲学史』の箇所で、スタンレーの立場を逆手にとるような、デカルト起源の〈近代的〉な自由な思惟の立場からこう述べている。「われわれは、新プラトン派とこれに関連するもの以来、はじめて本来の哲学に入る。これは哲学の新しい始まりである。一七世紀より昔の哲学史のなかでは、ただギリシア人およびローマ人の哲学があるのみである。……従ってキリスト教の中にも、またそれ以降にももはや哲学は存在していなかった。というのも、例えばスタンレーにおけるように、哲学はもはや必要なかったからである。中世の哲学的神学はそれ自身より出発する自由な思惟を原理としていなかった。」(Hegel, *ibid.*, Bd. 20, S. 121.)

(8) Proust, J.: *Diderot et l'Encyclopédie*, pp. 245—246.

なお加藤尚武氏は、(1)年代記ではなく時代区分が登場した点。(2)非西欧社会への視界の広がり、(3)叙述の客観性を、ブルッカーの先駆性として挙げ、さらに、彼の規定する近代の特徴を、(1)反権威主義、反伝統主義、(2)真なる折衷主義、(3)デカルト哲学が特権的位置を占めていない点に求めておられる。(加藤尚武、前掲書、三八—四〇頁)

ブルッカーが、アウグスブルクで哲学史に関する著作を著す以前、イェナで研究生活を送っていた当時、Christian Stock (1717—1731) がオリエント思想を教えていること。また、歴史叙述に関して、十八世紀が始まるとともに、方法論についての根本的な究明が盛んになり始める。ベールが十七世紀末に、既に懐疑的方法を用いていたが、それがとりわけ古代ローマ史の研究と結びついて行われていたこと (Bernheim. E.: *Lehrbuch der historischen Methode und Geschichtsphilosophie*, 5. und 6. Aufl. 1908, Burt Franklin, S. 223.)。実際、ブルッカー自身もベールに多くを負っており、ベールに多くの頁を割いている (Proust, *ibid.*, p. 250)。こうした状況と、彼自身の折衷主義の立場とが結びつくことによって、時間(時代)と空間の相対性へと向かったのではなかろうか。

この点に関して言えば、ベールの懐疑を方法論的武器として取り入れた折衷主義を標榜したディドロ——「折衷主義者とは、次のような哲学者のことである。すなわち、偏見、伝統、古さ、普遍的合意、権威、つまりひとくちに言って、多

くの精神をおさえこんでいるあらゆるものを踏みにじることによって、自分自身で考えることや、もっとも明白な一般的原理に立ち帰ってそれを検討し、議論することや、また、自分の体験と理性の証言にもとづくもの以外は認めないことなどを敢行するものである。」「……懐疑主義者というものが、折衷主義の要となる特色である以上、折衷主義者は常に懐疑主義者と相たずさえて歩み、そして、懐疑主義者がその厳格な分析によってもなお、無用な石くずとして捨てることができないものはなんでもとりいれるのである。」(「折衷主義」野沢協訳、『ディドロ著作集　第二巻　哲学Ⅱ』小場瀬卓三・左岡昇監修、法政大学出版局、一九八〇年)――さらに、ジェランドの「比較」という方法論的洗練を経て、クーザンへと至る折衷主義において、事は一層明確になる。

「……どの体系も……まったく間違いというわけではないが、……かといってまったく正しいわけでもない。」(Cousin, V.: 《Préface de la traduction du manuel de l'histoire de la philosophie de Tennemann》, *Fragments philosophiques pour servir à l'histoire de la philosophie* Paris, 1866, Slatkin Reprints, 1970, tome V. p. 222.)「いかなる体系も退けず、いかなる体系もすっかり受け入れず、ここは否定し、そこは取り入れ、真でありかつ善である、従って持続可能にみえるものをすべて選択する(choisir)という主張、一言で言えば、折衷主義」(*ibid.*, p. 224)、「これは、哲学史を拠り所としなければならない」(*ibid.*, p. 227.)。しかも、その哲学史とは「……現代や古代……の学説……、さらにオリエントの学説までも含んだ」(*ibid.*, p. 228.)ものである。「折衷主義という不滅の教えのない、哲学史など一体何であろうか」(*ibid.*, p. 229.)。折衷主義が語源上、「選択」を意味するのはクルークも指摘していることである。Krug, W. T.: *Allgemeines Handwörterbuch der philosophischen Wissenschaften nebst ihrer Literatur und Geschichte*, 1827—1834, 5 Bde., 2. Aufl., 1832—38, Aetas Kantiana, 152, Bd. 1., 〈Eklekticismus〉

さらに、もう一点。「折衷主義」は哲学史と結びついて、個人の考えでも思索の流儀でもなく、国民(国家)の哲学をあらわすようになった最初の概念ではなかろうか。本質的に国境を越えて、ナショナルな文化とは無縁だった十八世紀啓蒙思想に対し(『フランス啓蒙思想入門』J・H・ブラムフィット、清水幾太郎訳、白水社、一九八五年、二四―二五頁)、ヒュレボルンやクルークは、折衷主義をフランス哲学のレッテルに使用する。Fülleborn; „Einige Bemerukungen zur Geschichte der französischen Philosophie", *ibid.*, Bd. 2, 5. Heft, 1795.; Krug, *ibid.*, クルークは、〈ドイツ哲学〉の項目では、ヴォルフ学派を「最初のドイツ国民哲学 die erste deutsche Nationalphilosophie」と呼んでいる。Krug,

ibid., ニコンボルンの論文には Eberhardt, *Versuch einer Geschichte der Fortschritt der Philosophie in Deutschland*, Büsching, *Über französiche und deutsche Philosophie*, 1783. が引用されているが、このあたりが国民哲学の萌芽を示す著作であろうか。

(9) 『批判的哲学史』*Historia critica philosophiae a mundi incunabulis ad nostram usque aetatem deducta*, 5 volumes, Lipsiae, 1742—1744, 2. Aufl., 1766—67. この要綱版は *Institutiones hisoriae philosophicae usui academicae juventutis adornatae*, 1766.

(10) ローゲルの文献にもあるが、テンネマンによる『哲学史要綱』は *Grundriss der Geschichte der Philosophie für den akademischen Unterricht*, 1812, 5. Aufl. v. Wendt, 1829. クーザンの翻訳は 1829, 1839. なお、一八三三年には英訳、伊訳も出版されている。

(11) Cousin, *ibid.*, p. 228.

(12) de Gérando, J. M.: *Histoire comparée des systèmes de philosophie, relativement aux principes des connaissances humaines*, 1804, Paris, 3 volumes, 2e. éd., 1822—23, 4 volumes, tome 1., p. 146. p. 148,

ジェランドの『哲学体系比較史』は、ズアベディッセンによる、認識論史としての哲学史『プラトンからカントにいたる人間の認識本性についての哲学的探究の成果』(Suabedissen, Th. A.: *Resultate der philosophischen Forschungen über die Natur der menschlichen Erkenntniß von Plato bis Kant*, 1805, Aetas Kantiana, 271) に先行する、認識論と比較哲学から書かれた哲学史である。イデオローグとして知られているジェランド (Joseph-Marie baron de Gérando, 1772—1842) は、この書によりフランスへのカント紹介を果たした初期の人であるが、テンネマンによるドイツ語訳は *Vergleichende Geschichte der Systeme der Philosophie, mit rücksicht auf die Grundsätze der menschlichen Erkenntnisse*, 1806—1807.

ジェランドの哲学史も今ではすっかり顧みられなくなっているが、ヴィンデルバントは、スタンレーやブルッカーからローゲルに至る哲学史の成立課程を三段階——①ブーレー、フェンボルン、②ティーデマン、ジェランド、③テンネマン、フリース、シュライエルマッヘ——に分け、ジェランドに歴史把握の的確さと心理学的傾向を認めている。Windelband, *ibid.*, S. 9, S. 529.

因みにカントの第一批判は、クーザンが一八二〇年に《*Leçon sur philosophie de Kant*》という題目で講義をしているが、クーザンの弟子の Claude Joseph Tissot (1801—1876) によって一八三五年にフランス語訳がされている。さらに遡れば、Johannes Kinker (1764—1845) がその概要を一八〇一年に出している。*Essai d'une exposition succinte de la Critique de la Raison pure*, Amsterdam.

(13) ディドロ／ダランベール編『百科全書』ディドロ執筆「哲学」 桑原武夫編 岩波文庫、一九七一年、一七二頁。
なお、「ブルッカー氏がはじめドイツ語で」というのは、『世界の始まりからキリストの誕生にいたるまでの哲学史からの簡単な質問』(*Kurze Fragen aus der philosophischen Historie vom Anfang der Welt bis auf die Geburt Christi*, 9 volumes, Ulm, 1731–36) を指している。

(14) ダランベールによって想定された、考証学的博識 (érudition)→文学→哲学 (百科全書的知) という人間精神の進歩を参照。「この記念すべき時期以来の精神の進歩を考察するとき、こうした進歩は当然それがたどる順序でなされてきたことがわかる。まず、考証学的博識から始まり、文学に引き継がれ、最後は哲学でしめくくられることになる。」(前掲、ディドロ／ダランベール編『百科全書』ダランベール執筆「百科全書序論」、八三頁、但し引用は、J・プルースト『百科全書』平岡昇・市川慎一訳、岩波書店、一九七九年、一頁に従った。) érudition は、ドイツ語では Gelehrsamkeit に相当するのであろうか。

(15) Formey, J. H. S.: *Abrégée de l'histoire de la philosophie*, Amsterdam, 1760. 序論でこう述べている。「ブルッカーの歴史はあまりに大部であり……ラテン語とドイツ語で要綱が書かれており、さらに一般の使用に役立つものが必要である。またドイツで書かれた書物は、その言葉を理解するものにしか読まれず……、よく知られていることだが、その国境を越えることはほとんどない。」(Introduction, pp. 17—18.)
フォルメイの『要綱』は、テンネマンの文献では「概要と小著」(Compendien und kleinere Schriften) の項目に挙げられている。Tennemann, W. G.: *Geschichte der Philosophie*, 11 Bde., 1798—1819, Bd. 1, S. LXXXIII, Aetas Kantiana, 272. また、ドイツ語訳と英訳も出版されている。
Kurzgefasste Historie der Philosophie, Berlin, 1763.
A Concise History of Philosophy and Philosophers, London, 1766.

フォルメイ（(Jean Henri Samuel Formey, 1711—1797) は、一七四八年以来ベルリン科学アカデミーの哲学部門の書記であり、ヴォルフ哲学に傾倒した『ヴォルフ美人』(*La belle Wolffienne*, 6 Bde., Haag, 1741—1753) などの著作がある。『縮刷版百科全書』を一七四〇年代後半に企画し、彼自身『百科全書』に執筆もしている（ブルースト、前掲『百科全書』、六五頁、九四頁）。面白いことに、『十九世紀ラルース』でのフォルメイの評価は「学者 savant というよりも考証学的博識者 érudit」となっている（*Larousse, Grand dictionnare universel du XIXe siècle*, 17 *vols.*, 1866–1879）。エンフィールドのものは、

Enfield, W.: *The History of Philosophy from earliest periods, drawn up from Brucker's Historia critica philosophiae*, London, 1791.

(16) Proust, *ibid.*, p. 250, p. 267.

(17) Proust, *ibid.*, p. 267, ブルースト、前掲『百科全書』、一七八頁。

(18) ブルースト、前掲『百科全書』二五四頁。

(19) Proust, *ibid.*, p. 247.

(20) 前掲、ディドロ／ダランベール編『百科全書』、一七二頁、〔　〕は筆者。

(21) Tennemann, W. G.: *ibid.*, Bd. 1, S. LXXXI. 余談だが、テンネマンの文献にはP・ベールの『辞書』は記載されているが、『百科全書』が挙がっていない。もっともイヴォン師のように、ブルッカーからの丸写しもあったからかもしれないが、芸術 arts と工芸 métiers を排除した純粋哲学への指向を示唆しているようで興味深い。それに対しジェランドは『比較哲学史』で、本来の哲学史家に、ブルッカー、クロマチアーノ、デランド、スタンレーと並んで百科全書派を入れている。

また、テンネマンによるドイツ語訳後の第二版では、こう言われている。「翻訳の序文で、テンネマン氏はこう語っている。ジェランド氏はデランド氏以来の哲学史全体を総括した第一級のフランス人記述者 écrivain である、と。」(De Gérando, *ibid.*, tome 1, avertissement, p. iii par libre-éditeur) 少し遡ると、クロマチアーノも『哲学史』の冒頭でデランドを引用し、無知から学への移行を記述することが、哲学の仕事と成りうるのかを問うている。Heydenreich, *ibid.*, S. 5.

(22) André François Bureau-Deslandes, 1690—1757,（デランドあるいはブロー＝デランドと表記される）: *Histoire critique de la philosophie, où l'on traite de son origine, de ses progrès, et des diverses révolutions qui lui sont arrivées jusqu'à notre temps*, 1730—36, Paris, 1737, Amsterdam, tome 1—3, 2e., 1756, Amsterdam, 4 volumes. アムステルダムでの初版では著者名が記されないまま、第一巻から第三巻まで、つまりギリシア以前の哲学史からスコラ哲学史までが出版されている。以下に、目次を掲げておく。

第一巻、第一書、ギリシア以前の哲学の状態について
　第二書、寓話的哲学と七賢人について
第二巻、第三書、ギリシアを飾った哲学の二つの主要なセクトとその創始者であるタレスとピタゴラスについて
　第四書、ソクラテスとその一門、とくに哲学の新しいセクトをつくった人々について
　第五書、エレア派、ヘラクレイトス、ピュロン、デモクリトス、エピクロスについて
　第六書、プトマイオス朝下のアレクサンドリアに華ひらいた哲学者たちについて
第三巻、第七書、ローマに華ひらいた哲学者たちについて
　第八書、トラヤヌス統治下からローマ帝国の衰退までに、そして衰退から東ローマ帝国の崩壊までに華ひらいた哲学者たちについて
　第九書、アラビア人とスコラ学派によって発明された新しい体系について
第四巻、第十書、ヨーロッパの文芸哲学復興。デカルトという先駆的哲学者についての一般的注解

第一巻の総目次と異なり、第四巻そのものでは「イタリアでの文芸復興とつづいてヨーロッパの他の王国で起こった文芸復興について」となっている。ただし初版が手元にはないため、第一巻の目次についても第二版に従っている。

(23) Deslandes, *ibid.*, tome 4, avertissement, a3.［ ］は筆者。

(24) Deslandes, *ibid.*,「……哲学は、リセやアカデミーで使われるためだけの純粋思弁の教説では決してない」(Deslandes, *ibid.*, tome 1., X)。あるいは卑俗なソクラテス的な言い回し——「よく考えることと……よく生きることをも教える」(*ibid.*, XI)。なお、Schulphilosophie あるいは Schulweisheit は、世俗的な、処世訓を教える通俗的な、Lebensphilosophie, Lebensweisheit と対比して使用されていたようである。Krug, W. T.: *ibid.*, Bd. 2.

(25) プルースト、前掲『百科全書』、九頁、四四頁。
フォルメイが『要綱』を著す際、念頭に置いたのはディドロだけではない。彼はデランドをも、自由思想家（esprit fort）と考え、彼の『哲学史』は「精神を啓発するよりも駄目にする」と言っている。(Proust, *ibid.*, p. 247, note 70)
(26) Deslandes, *ibid.*, tome 1, IV.
(27) Deslandes, *ibid.*, tome 1, II.
デランドは、ここでスタンレー的な哲学史と訣別を図っているわけであるが、プルーストは、「啓示」を軸にした時代区分を採用してデランドが「護教論的伝統」に傾斜していると考えている。(Proust, *ibid.*, p. 242.) Noack の評価もこれに近い。
(28) Deslandes, *ibid.*, tome 4, avertissement, a2.
(29) Deslandes, *ibid.*, tome 1, VI—VII.
(30) Deslandes, *ibid.*, tome 4., p. 174.
(31) Deslandes, *ibid.*, tome 4., p. 179.
(32) Deslandes, *ibid.*, tome 4., pp. 181—183.
(33) 「十六世紀の言語は、自己にたいして、たえざる註釈という立場をとっていた。ところでこの註釈は、何らかの言語がそこにある——何らかの言語が、それを語らせようとして用いられる言説に先だって沈黙のうちに実在する——という条件ではじめておこなわれるものにほかならない。註釈を加えるにはテクストの絶対的存在が必要なのだ。」「ところが古典主義以後、言語は、表象の内部、表象のなかに空洞を設ける表象それ自体の二重化のうちに展開される。爾後、第一義的〈テクスト〉は消滅し、」「表象だけが残り、それを顕現する言語記号のなかにくりひろげられ、そのことによって〈言説〉となるのである。」「人々はただ、この言説にたいして、それがいかに機能しているか、つまり、それがいかなる表象を指示しているか、いかなる要素を截断し取りあげているか、いかにして分析と合成におこなっているか、いかなる置換の仕組みによってみずからの表象的役割を確保しているかを問うだけである。〈註釈〉が〈批評〉に席をゆずったのだ。」「批判は言語を、真実さ、正確さ、適切さ、あるいは表現的価値などの用語で分析せざるをえない。」（M・フーコー、『言葉と物』、渡辺一民・佐々木明訳、新潮社、一九七四年、一〇四—一〇五頁）
(34) M・フーコー、前掲書、一五三—一五四頁。

(35) 野沢協、前掲書「解説」、一一六五—一一六六頁。
(36) 野沢協、前掲書「解説」、一一八八頁。
(37) 哲学史成立とともにドイツ語圏では Historie に代わって、Geschichte の語が用いられるようになるが、その初期の例は、Lodtmann, K. W.: *Kurzer Abriss der Geschichte der Weltweisheit, nach der Ordnung der Zeiten, zum Gebrauch akademischer Vorlesungen*, Helmstädt, 1754, であり、「哲学史」という語としては、Büsching, F. A.: *Grundriss einer Geschichte der Philosophie und einiger wichtigen Lehrsätze derselben*, 1772—1774, 2 Bde., Berlin である。十九世紀にはラテン語の Historia は、komisch な使い方でしか用いられなくなっている。Jacob und Willhelm Grimm: *Deutsches Wörterbuch*, Lebzig, 1897.
(38) 「……ベール、ブルッカー、『哲学の批判的歴史』におけるデランドは、人間精神の進展の輪郭を取り出そうとし、考証学と歴史を批判的理性に奉仕させようとした。」プルースト、前掲『百科全書』、八頁。
幾分深読みすればクーザンのテンネマン評価も、この三つの概念に沿っているといえよう。「その長所は、一、考証学的博識、二、批判、……三、哲学的知性である。」(Cousin, *ibid.*, p. 229.) ただこの場合、考証学的博識を「歴史的」と理解することは可能だろうが、「批判」は、歴史批判の意味で用いられているにすぎない。
(39) Tiedemann, *ibid.*, Bd. I, S. V.
(40) Schulze, G. E.: *Grundriss der philosophischen Wissenschaften*, Bd. I. 1788, S. 7, Aetas Kantiana, 243, Reinhold, K. L.; „Über den Begriff der Geschichte der Philosophie" in: *Beyträge*... hrsg. v. Fülleborn, Bd. 1. S. 31. 周知のヘーゲル『哲学史』では、Hegel., *ibid.*, Bd. 18, S. 29.
(41) Fülleborn, *ibid.*, Bd. 2, 5. Heft, S. 200, Heydenreich, *ibid.*, Vorrede, Tennemann, *ibid.*, Bd. 1, S. XXI.
(42) 「批判 (Kritik) は分かつ (κρίνω) ことを意味する。」(高橋昭二、『カントの弁証論』、一九六九年、創文社、二六八頁)
(43) Reinhold, *ibid.*, S. 11, 15, 20. また、哲学史を人間精神の歴史から区別しようとするラインホルトの見解は純粋哲学史への指向を表しており、注目に値する。*ibid.*, S. 21.
(44) Tennemann, *ibid.*, Bd. I, S. XXI.

(45) Tennemann, *ibid.*, Bd. I, S. XXIX.
(46) Tennemann, *ibid.*, Bd. VIII, S. XIV.
(47) Tennemann, *ibid.*, Bd. I, S. IX.

付記 本稿は、第二十四回大阪カントアーベント例会（一九九二年七月十一日、大阪大学待兼山会館）において、口頭発表した草稿に加筆したものである。

（大阪大学文学部助手）